

広 隆 寺 跡

—右京検察庁庁舎改築に伴なう発掘調査の概要—

昭和55年度（1980）

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

目 次

I 調査経過.....	1
II 遺 跡.....	2
1. 層 位.....	2
2. 遺 構.....	3
III 遺 物.....	4
IV ま と め.....	4

挿 図 目 次

図1. 調査位置図	1
2. 調査区位置図	2
3. 調査区東壁土層堆積図	3

図 版 目 次

図版1. 遺構平面図 (平安時代)	
2. 遺構平面図 (古墳時代)	
3. 1 調査区機械掘り風景(東から) 2 平安時代柱跡群全景(東から)	
4. 1 古墳時代面全景(東から) 2 穴住居跡1近景(東から)	
5. 1 穴住居跡2近景(西から) 2 穴住居跡2カマド(西から)	
6. 1 平安時代柱跡内遺物出土状況(東から)	
2 穴住居跡2カマド内遺物出土状況(西から)	
7. 穴住居跡2出土遺物	
須恵器蓋 (2) 杯 (3.4) 土師器杯 (1) 鉢 (6) 壺 (7.8) 鍋 (5)	

I 調査経過

京都市右京区太秦東峰岡町1番地の2の右京区検察庁で庁舎建替え工事が行なわれることになった。当該地は広隆寺旧境内の東南辺に位置し、これに伴なう遺構の検出が充分に考えられた。このため京都市埋蔵文化財調査センターは財団法人京都市埋蔵文化財研究所に試掘調査を依頼した。

これを受けた研究所は、昭和55年8月27日、調査地内に3ヶ所の調査区を設定し試掘調査を実施した。この結果、3ヶ所の調査区すべてに落込、土壤、柱跡等を確認し、古墳時代から平安時代に及ぶ遺物を検出した。特に古墳時代の遺物を検出したことは、広隆寺創建との関係で興味がもたらされた。

このため充分な調査の必要が生じ、試掘調査にかけて発掘調査を実施することになった。発掘調査は昭和55年10月20日から同11月24日まで延べ30日間にわたった。10月20日にまず調査区（東西13m、南北10m）を設定、重機による表土層排土を行なった。このあと測量、平安時代遺物包含層の排土作業、遺構検出を経、10月31日から平安時代の柱跡群の検出、調査、記録、写真撮影、断ち割りを行ない、11月12日より更に古墳時代末の竪穴住居址の調査に入った。住居址は3棟を検出し、このうち遺存度の最も高い1棟（2号住）の



図1 調査位置図

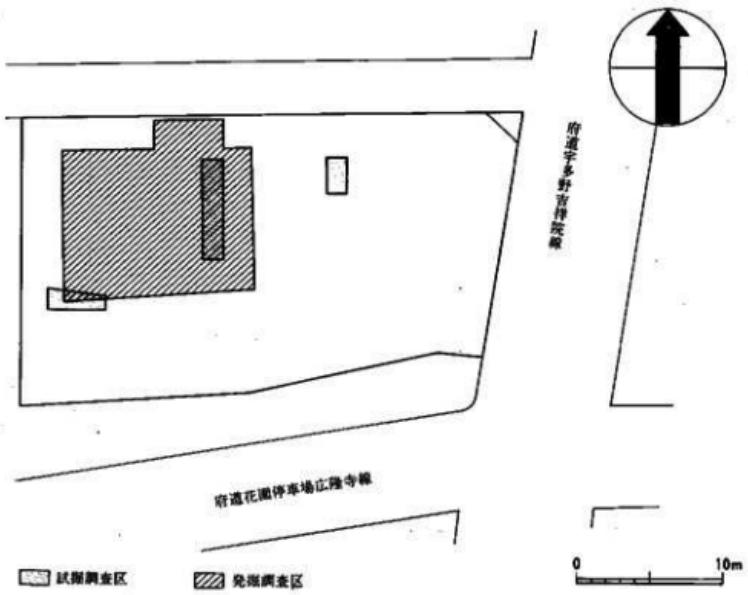


図2 調査区位置図

北半を明らかにするため拡張作業を行ない、これに伴なう遺物やカマドを検出した。こうして11月23日までに各住居跡と調査区の断ち割りを終え、11月24日に器材の引上げを行い、現場での調査を終了した。

調査面積は本調査区130m²及び拡張区10m²と試験調査区を合せて約160m²であった。

II 遺 跡

1. 層 位

調査区全体は旧廃舍解体時の整地土が厚さ約20cmでおおう。これを耕土すると淡茶色泥砂層厚さ、約30cmが表われ、これは下層の茶褐色泥砂層と共に平安時代中期の遺物を含む。茶褐色泥砂層中の遺物は土師器小片が多く土質も軟弱であり旧耕土層であろう。しかし茶褐色泥砂層は堆積が密で、平安時代中期造構廃絶直後の整地土層と考えられる。

平安時代中期の柱跡群は、茶褐色泥砂層耕土直下で検出され黄灰色泥砂層（調査区南側

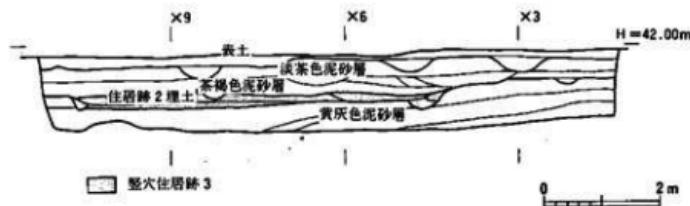


図3 調査区東壁土層堆積図

では淡黄灰色砂礫層)を切り込む。古墳時代の住居跡も同一層位で検出された。これは、古墳時代遺構面が流失ないしは削平を受けた結果であろう。

以下の堆積土層は黄灰色泥土層と黄灰色砂礫層が互層を成す。傾斜は南東方向に下りをもって順次堆積している。これらの層中には遺物を確認していない。

2. 遺構

古墳時代末期と考えられる豊穴住居跡を3棟検出した。更に平安時代中期と考えられる掘立柱建物跡4棟、櫛路を2列、他に柱跡を約90ヶ所、土壙5基を検出した。

豊穴住居跡 住居跡は3棟検出され、このうち2棟(住居跡1、住居跡3)は出土遺物も少なく、カマドも持たない。しかし住居跡2はカマドを備え、遺物も比較的多かった。

住居跡1は平面形は隅丸方形を呈し、東西5.4m、南北4.5mを測る。柱間隔は東西2.8m南北2.5mで周溝は明瞭に巡る。床面は淡褐色砂礫層上面と考えているが、叩きしめられた形跡はない。軸線は北西から南東を向く。

住居跡2は平面形が隅丸方形で、東西3.8m、南北3m以上、柱間隔は2.3mを計る。北西壁付近にカマドを持つ。カマド内には側壁の焼土塊が崩落しており、他に炭、灰を検出した。またこの前面に巾20cm、長さ50cm以上、深さ15cmの落ち込みがあり、炭、灰を埋土に含む。用途は不明であるが、カマドに付随する何らかの施設と考えられる。遺物はカマド内及びカマド南側の床面で土師器、須恵器などが検出された。

住居跡3は隅丸方形で、南北6m、東西4.5m以上を測る。柱間隔は3.4mで北東部分の周溝は不明瞭であった。

掘立柱建物跡 建物跡は4棟を確認している。建物跡1は東西4間分、南北3間分を検出した。柱間隔は東西、南北とも約1.5mを測る。柱跡掘形の直径は各80cm前後と大型で、深さは30cm程度である。建物2は東西4間、南北2間分を検出した。柱間隔は桁行中央2間分のみが1.6m、他はすべて2.2m間隔である。

建物3は東西4間、南北2間の検出をみた。柱間は1.9mを測る。建物4は東西2間、南北2間分を確認した。

その他の遺構 棚列を2列及び土壙を5ヶ所で検出した。土壙2は平安時代中期の遺物を大量に含む。直径約3mの円形で深さ50cmを測る。不用品投棄穴であろう。

III 遺 物

竪穴住居跡2より古墳時代末期の土師器、須恵器が、土壙2から平安時代中期の土師器、須恵器、綠釉、灰釉、黒色土器などが出土した。その他、淡茶色泥砂層、茶褐色泥砂層及び掘立柱跡埋土中より少量出土している。総量は整理箱10箱である。

竪穴住居2 カマド内埋土中より土師器鍋、鉢、甕の部体、須恵器杯が検出された。更に床面より土師器壺、須恵器杯蓋が出土した。

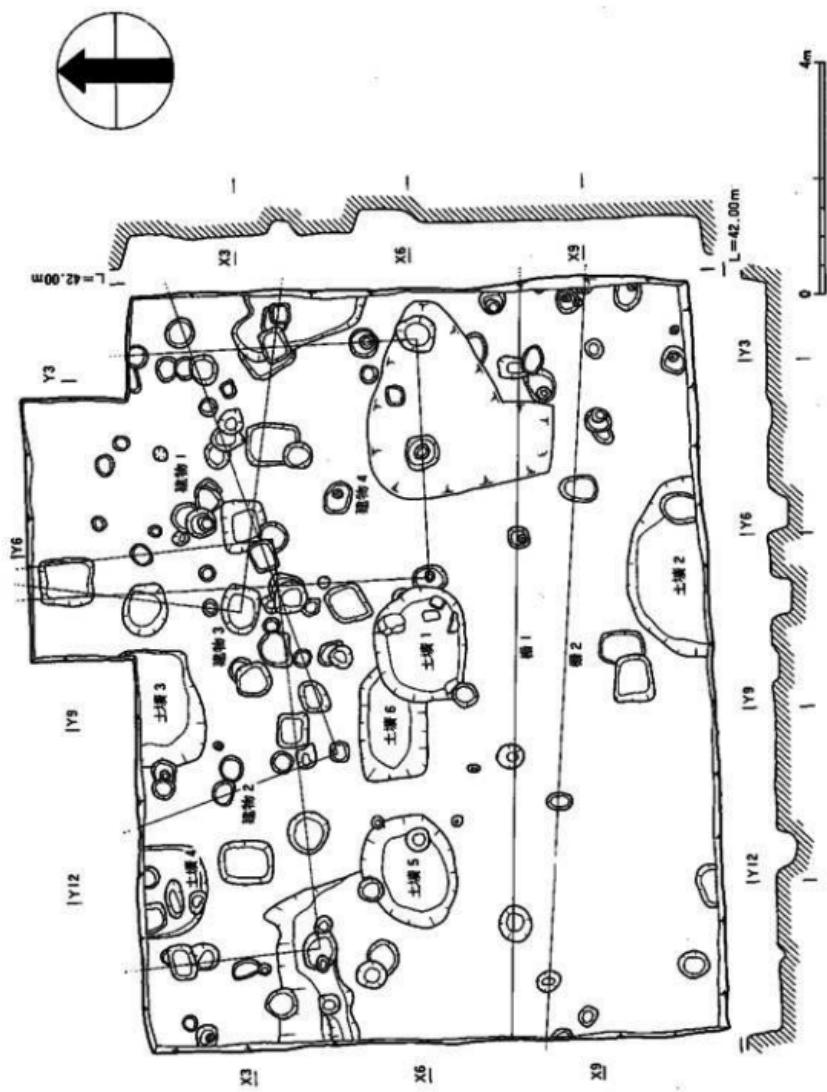
土壙2 土壙2からは土師器杯、皿、高杯、甕、黒色土器壺、須恵器壺、鉢、綠釉壺、灰釉皿、瓦片などが出土した。

IV ま と め

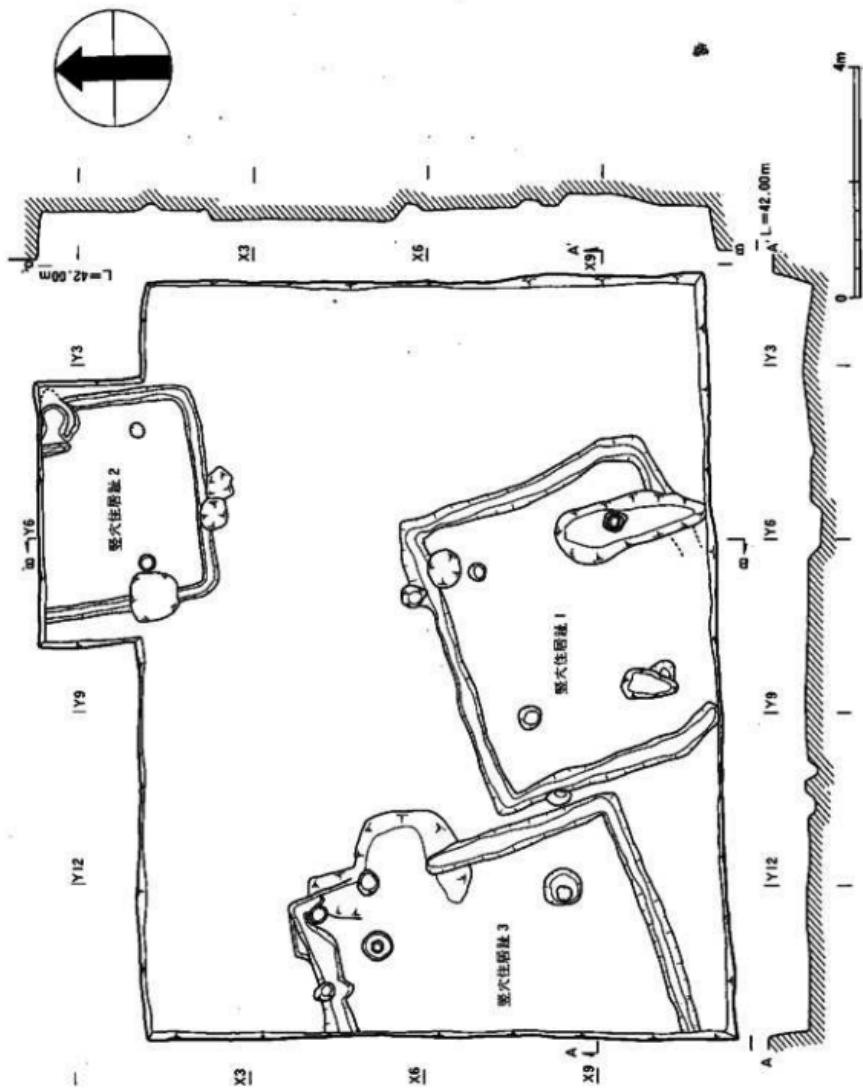
住居跡1、住居跡3はカマドや貯蔵穴も持たず、遺物も土師器、須恵器の小片を少量含むのみで生活的痕跡は希薄である。

近辺の竪穴住居跡検出地点は今までに3ヶ所を数える。現在の電々公社太秦寮のある地点の、常盤中之町集落跡発掘調査-1987-で住居跡24棟、広隆寺境内靈宝殿西隣の調査では住居跡4棟を検出し、今回の3棟を加えて総計31棟にも達した。上記住居跡の時期はいづれも古墳時代末（7世紀前半）で、地域的なまとまり（上記3地点は南北300m、東西200mの範囲にある）も考えられ、同一集落に属する可能性は高い。

今後はこの集落の範囲を確認して行く作業が急務となる。この付近の立会、試掘、発掘を含めた調査を充分行なっていく必要があるだろう。



造構平面図（平安時代）



造構平面図（古墳時代）



1 調査区機械掘り風景（東から）



2 平安時代柱跡群全景（東から）



1 古墳時代面全景（東から）



2 穂穴住居跡Ⅰ近景（東から）



1 穫穴住居趾 2 近景（西から）



2 穫穴住居趾 2 カマド（西から）



1 平安時代柱跡内遺物出土状況（東から）



2 竪穴住居跡2 カマド内遺物出土状況（西から）



豎穴住居跡2出土遺物 須恵器蓋(2) 杯(3・4) 土師器杯(1) 鉢(6) 壺(7・8) 鍋(5)

広 隆 寺 跡

—右京検察庁舎改築に伴なう発掘調査概要—

55-26

発 行 日 昭和56(1980)年3月31日

発行・編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
TEL (075) 415-0521

印 刷 (有) 真 陽 社